はじめに

一つの問題を深く研究することは、いろいろ困難なことが多い。そしてその研究が、何時でも中途半端でおわって完成をみない。私の研究は特にそれが多くて一般の批判をうける。だが私は考える。「完成なんてありやしないんだ」と。もし完成したことがあるとしたら、それは学問の終わりを意味するのである。私はまた新らしいことを考える。「先の問題が何一つ解決していないではないか」とまた批判され、私はそれを知っているのだが、浮気性なのか、新らしいことに夢中になる。だが考古学という学問、最早や骨董屋の仲間ではないのだから、資料的取り扱いを科学的にやらねばならぬのである。私の夢は、夢見過ぎの方で、なかなか骨董的感覚から脱しきれないのである。勿論骨董学も近頃は、古美術学と改名して、その美的感覚を大いに養成しないと、この途でも落第生となりかねない。「私は何処に行ったらいいのだろう」、そんな弱気になることがある。1月末に奈良学芸大学で「古文化財」の研究会があった。すべて理化学ずくめの、この発表はこれからの考古学の行先を示唆したものであった。私は熱心に最前列で各種の発表を聞いた。東北大学の芹沢長介教授が、「君は何時も最前列で熱心にノートをしていて感心、感心」とひやかされた。事実われながら熱心であったと思う。が、しかし、不思議なことに大半はついて行けぬものばかりであって、「結果だけが大切だ」と思うのであった。しかし、私が夢をみた、「農耕の起源」の問題にふれた分折学の発表には、私も「眦を決して」拝聴した。データは、それぞれ正しい分析結果であったはずであるが大きく意見がわかれる。私は考えた。分析が間違っているはずがない。とすると試料の選択で考古学分野のミスなのだろうか。このことに関して、層位学の重大さを痛感せざるを得なかった。私は科学の発達の前に、土器の分類や、その層位的把握が、もう一度、昭和の初めにもどって基礎を考えてみる必要はないものか、反問を重ねて九州に帰ってきた。

何一つわかってはいない。九州の縄文土器も故小林久雄氏に尋ねてみよう。そしてもう一度その初めからやりなおそう、と思うのである。ここに九州の「円筒土器」なる問題をかかげたのは、故小林久雄氏や坂本経堯氏の亡霊に呼び止められて……オヤリナサイ……ぞっとしてかかげた問題である。「分類学という古くさい研究は、理化学的分析の基礎となるのである。」私はそんなことを考えながら、この特集を長い間考えてきた。この次は何をやろうか。私の浮気心をはやらせる夢は果たしてどんなスタイルの土器であろうか。黒色磨研土器の時のように批判されても私は夢を追っかけたい。

1977年6月1日

鹿鳴越の里にて

賀　川　光　夫